及ぶとぞ、これはかぶろぎくといへる菊ありて、そのたねよりまきいだせしとなん、又小ぎくといひて、同じ頃至てちいさき花あるをも、とり合て賞翫せしなり、其のち明和中に、中山菊といへるものいできて、めづらかなる花びらなど有て、今に世にもてはやすにより、大菊小菊などはすたれたり、

〔一話一言八〕菊の名

垂加草に云、大源庵菊、其白者名大牡丹、花樣如牡丹也、其黃者名眞盛、種自越前出也、眞盛越前之產　また支考が菊合序に、寶永のはじめより、夷洛に此花を玩びてとあれば、久しき事にはあらじ、序中に見へし菊の名は、

初霜　薄雪　金より　銀より　小金めぬき　濡鷺　香爐峯　釜山海　金鸞　銀鳳　御法村雨　小手卷　李將軍　飛鳥川　きなこ鳥　白臥龍　月下門　宇治　ふしみ　山崎有明　花麒麟　金翅鳥　紫金龍　朱雀門　婆羅門　阿蘭海　衣通　三人鑑　大和笠

かばかりの事も、時々に違ひて、今の花は昔の名にはあらじ、

金目貫といふ菊を、今省きてきんめといふ、續山井、こがねきくは霜の劒の目貫かな、倫加　後撰夷曲集、淨華院にて御八宮方葉までよく咲みだれたる作りやう、金目貫の菊一文字とあれば、前の發句も、金目貫の字をわけて作れる句とみゆ、こがねとばかりは、黃菊をすべていふやうなり、

〔草木育種下藥品〕菊本草　菊の類は實ばへにて、年々花形變故その數を知ず、花鏡云、如劉蒙泉菊譜、遂有一百六十三品、范至能、史正志、馬伯州、王蓋臣、皆有譜、其名目至三百餘種云々、菊の實を蒔には、山の野土の肥たるか、又黑ぼくにもよし、濕地を嫌也、高き所にて相應の土に肥土を合、代を拵、其內へ二月初に蒔、其上へ藁の至て細き麓を少し振かけ、雨覆をして置、生て後覆を取べし、植る地は冬中、野土或黑ぼくの內にて、菊を植ざる肥地を掘、その上へ人糞を澆、よく切ませ寒にいてさせ

菊栽培